

調査報告

「湾生」と疎開者による台湾・沖縄経験
—平良玄福・盛島サカエ オーラルヒストリー—

菅野 敦志¹⁾

Memories and Living Experiences in Colonial Taiwan of
a Taiwan-Born Okinawan and an Okinawan Evacuee:
An Oral History of Genfuku Taira and Sakae Morishima

Atsushi SUGANO¹⁾

要 旨

本資料は沖縄在住で台湾経験を有する人物へのインタビューを基にしたオーラルヒストリー集の一部である。本インタビュー記録は、台湾・基隆（社寮島）に生まれ育った平良玄福氏と、戦時中に台湾疎開を経験した盛島サカエ氏という、同じ台湾と宮古での生活経験を持つ「湾生」と「疎開者」のオーラルヒストリーである。台湾生まれの「湾生」である平良氏と、「疎開者」である盛島氏は異なった台湾生活経験を有するものの、同年代である両氏はともに日本統治下の台湾で暮らし、日本の敗戦により宮古島に引き揚げた点において共通の人生経験を有しており、そうした「同年代」と「同地域」という共通点を有する両者による台湾—沖縄（宮古）体験の比較はきわめて示唆的である。なお、本資料の目的は、個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく、日本統治時代の台湾で人々がどのように生活してきたのかを記録化することに主眼を置くものである。沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について、日本統治時代の台湾で実際にどのような生活を各個人が経験してきたのか、本稿はそうした実際の生活体験の聴き取りを記録化し、研究の一助とすることを目的とする。

キーワード：オーラルヒストリー、台湾、沖縄、宮古、人の移動

Abstract

This is one of a series of interviews which are the fruits of an oral history project that focuses on collecting memories of Okinawan / Japanese people who lived in Taiwan during the Japanese Colonial Era. The project's aim is not to record the political or economic success of prominent individuals; rather, it emphasizes recording personal lives and experiences of ordinary citizens of the time, which would not be recorded in an official history. This is the set of oral histories of Genfuku Taira and Sakae Morishima; the former is a Taiwan-born Okinawan and the latter is an Okinawan evacuee to Taiwan during World War II. When the war ended in 1945, they both were repatriated to Miyako Island in Okinawa. Because of their commonalities in age and the places they have traveled, we can learn how those experiences and memories from their adolescent years in Taiwan were influential even after their postwar years in Okinawa. This series of oral history interviews was supported by JSPS KAKENHI Grant (Number: 25257009).

¹⁾ 名桜大学国際学群 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa 905-8585, Japan

Keywords: oral history, Taiwan, Okinawa, Miyako, migration

【概要説明】

本資料は沖縄在住で台湾経験を有する人物へのインタビューを基にしたオーラルヒストリー集の一部である。

独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (A) (海外学術調査)「日本敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」(課題番号: 25257009) では、研究代表者の栗原純および研究分担者の所澤潤を中心とするオーラルヒストリーの採集・記録の蓄積が精力的に進められてきた(一連の成果は、『台湾口述歴史研究』シリーズとして、2016年3月に第19集まで出ている。編集: 台湾オーラルヒストリー研究会、発行者: 東京女子大学 栗原研究室)。

オーラルヒストリーは、語り手にとっての個別の史実をどのように一般化できるかという課題について、証言をいかに記録化するかと同時に、証言の批判的な読みが必要となってくる点がしばしば指摘される。しかし、現在においても、日本の植民地であった台湾で実際に人々がどのような環境の中で日常の生活を営んでいたのか、「内地人・沖縄人・本島人」(本島人: 日本統治時代に用いられた台湾人の呼称)の関係性や相互の感情にはどのようなものがあったのか、彼らが戦後お互いにどのようなつながりを有していたのか等、当時(あるいはその後)の状況が十分明らかにされ尽くしたとは言い難い状況にある。

そのようななか、戦後70年が経過し、かつて日本が有していた植民地での生活経験者の聞き取りにはもはや時間的余裕が残されていない。そのため、1人でも多くの日本統治経験者の聞き取り蓄積を残し、公の記録ではあまり見受けられない、こうした一次史料の一刻も早い記録化と蓄積作業の進展が急がれている。このような問題意識の下、これまでの研究グループによるオーラルヒストリーの成果を基に、筆者は研究分担者の1人として、沖縄出身/在住者で台湾での居住・生活経験を有する方々へのインタビューを実施してきた。本資料はその成果の一部として位置づけられるものである。

本インタビュー記録は、平良玄福氏と盛島サカエ氏のオーラルヒストリーである。平良玄福氏は、沖縄出身の両親の下、1935年(昭和10年)に台湾最大の沖縄人集落(約500~600人が居住)であった基隆の社寮島に生まれた。台湾で終戦を迎え、1946年11月に台湾から沖縄・宮古島に引き揚げた。引き揚げ後は、宮古の小学校、中学校を卒業して宮古製糖工場に就職、その後宮古でパイオニア鉄工所を開業し、現在にいたる。

盛島サカエ氏は、沖縄出身の両親の下、1934年(昭和

9年)に宮古島の池間島平良村に生まれた。1944年、戦況の悪化により国民学校4年生の時に1年間の台湾疎開を経験する。台湾で終戦を迎え、終戦から約1カ月でヤミ船に乗り台湾から沖縄・宮古に引き揚げた。引き揚げ後は、八重山や名護のパン工場などで働いた。

本資料は、沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について、日本統治時代の台湾で実際にどのような生活を各個人が経験してきたのか、そうした実際の生活体験の聴き取りを記録化し、研究の一助とすることを目的とする。特に、本資料が特徴とするのは、「湾生」(台湾生まれの日本人)の平良氏(1935年生まれ)と、疎開者であった盛島氏(1934年生まれ)の両者が有する、①わずか半年違いの出生というほぼ同学年であったことから、同世代の感覚・視点で同時代を生きていたこと、②両者ともに台湾と沖縄(宮古)という同じ二地域を移動し、両地での生活経験を有すること、という二つの共通点である。

平良氏は、日本統治下の台湾で最大の沖縄人集落といわれた基隆・社寮町出身で、沖縄出身者と台湾人との草の根での交流を間近で見て育った。他方、盛島氏は疎開による台湾での生活経験であるため、期間は1年間に限られるものの、しかし、その1年の台湾経験は盛島氏がその後の人生を生き抜く際に大きな原動力になったという。本資料の目的は、個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく、日本統治時代の台湾で人々がどのように生活してきたのかを記録化することに主眼を置くものであるが、台湾生まれの「湾生」である平良氏と「疎開者」である盛島氏、それぞれの台湾滞在期間の長さは異なっているものの、台湾と宮古の両地での共通の生活経験を持つ両氏の比較はきわめて示唆的である。それは、「湾生」と疎開者という立場の違いはあるものの、上述した「同年代」と「同地域」という二つの共通点を有する両者の台湾・沖縄経験の比較から、市井の市民が実際に経験した台湾―沖縄(宮古)間の「人の移動」の諸相について、より立体的な理解を深めることが可能となるからである。

なお、インタビューは、平良氏は2014年11月15日、場所は宮古市内の飲食店にて実施した。盛島氏は、2014年2月20日と3月2日の2回に分けて、場所は那覇市首里の盛島氏自宅にて実施した(本記録は2月20日実施分)。なお、文中で括弧書きがある部分は筆者による補足説明である。

第1部 平良玄福 オーラルヒストリー

1 家族構成

菅野 お生まれになって、小さい頃からの話を順番にお聞かせいただけますでしょうか。

平良 僕は昭和10年4月、台湾基隆市社寮町500番地の2に生まれた。で、台湾で終戦までずっと過ごしていました。家族は、僕ら7人きょうだいだった。親父は16の時に台湾に移住して、母とお見合い結婚。そういうことで、僕らは台湾で生まれた。親父は漁師。すごい腕の利く漁師で。夜も昼も。終戦後はツキ船の船長をしてカジキを釣っていた。

菅野 ごきょうだいについて教えていただけますでしょうか。

平良 僕は長男で、姉が1人いて、残りは弟たち。姉は昭和8年生で、僕は昭和10年生。そして妹が昭和13年生。その次男が昭和15年生。三男が昭和17年生。それから三女と四男はちょっとわからんけど、7人きょうだいで。末っ子の四男は宮古に来てから生まれた。三女は戦争中に生まれて。

戦争が、日本が負けてしまった昭和20年の8月15日、台湾にずーっとおりたい気持ちがあって、台湾におったんだけど、戦争に負けて、もう帰らなきゃいけなくなった。で、最後の最後までおったけど、最後の昭和21年11月23日、最後の引き揚げで。親父だけ残して。

母を先頭にして、宮古島に帰ってきて。帰ってきてびっくりしたのは、電気が無いから、もう夜はランプで真っ暗。大変な生活だった。

2 幼少期の生活環境

菅野 お生まれになった基隆の社寮町について教えてくださいませんか。

平良 今、社寮町は和平島になってるけど、昔は社寮町って言っていた。今は橋が出来てるけど、橋が無い時は、サンパンという船で通っておったみたいだった。その橋を渡って学校に行きよった。僕らが小さい時は、台湾の漁師たちが夏は天草を取って寒天を作る。それを本土に送っておった。で、その時期が外れると、その倉庫が空いて、活動写真。社寮町にも映画館、活動写真があったわけ。それを非常に楽しみにしていた。わざわざ基隆に行かないと、映画館は無かった。社寮町にも、その倉庫が空く時に、活動写真、映画館になっていた。

沖縄の人、沖縄の漁民が社寮町にいっぱいあって、本当に沖縄人ばっかりの部落みたいだった。台湾の人たちも沖縄の人とは、もう本当に仲が良かった。本土

の人とはあんまり台湾の人は付き合いは無いけど、沖縄の人とすぐく付き合いがあって、楽しかった。また、言葉が、明治20年位30年位の人たちは日本語があんまり話せないけど、台湾人もまた真似して沖縄の言葉を使っていた。子どもの時に見とったら、台湾の人たちでも片言の沖縄の言葉を。

だから、とにかく台湾と、沖縄の人と台湾人とは特に、なんていうのかね、気持ちがすぐ通じ合ってね、とっても楽しく。台湾の人たちは、漁師がいなかった。潜りをする人もいなかった。それで沖縄の人たちが教えたりして、潜りもやっとなつたみたいだけど。八重山の人も多くいたし、糸満の人も多くいた。で、糸満の人たちは、一時期だけで帰ったりしとったような気がする。で、宮古の人は社寮町にもおつとった。

菅野 社寮町には沖縄の方が500人ほどいたと言われてますね。

平良 社寮町はとっても住み良い所で、沖縄の人がいっぱいいて。料亭も2軒あった。基隆は社寮町から橋が架かって、その横には金瓜石（キンカセキ）という所があって、金が採れるところ、そこでも宮古の人たちが働いておって。その金瓜石にも宮古の人が働いておって、たまたま遊びに行ったら、台車の線路の横なんか、太陽が照ると金がピカピカ光ってね。そういう風な記憶があるけど。

だけど、空襲が激しくなったもんだから、山の中の防空壕に入って。それから空襲があんまり激しくなったもんだから、ずーっと田舎の方に疎開して。彰化ってところに。彰化郡のずーっと田舎の方に疎開して。そこで3カ月生活して。向こうの人も皆いい人だった。

3 国民学校

菅野 台湾での学校について教えてください。

平良 台湾は真砂学校っていう学校で。小学校はね、台湾の真砂学校に2年まで出て。3年までかな。戦争が始まって、学校も行かないで。

私の住んでおった基隆はね、冬はもう、毎日毎日雨。10月から翌4月までずーっと雨が降る。「雨の基隆」と言われていた。小さい時はよく、海が好きで、毎日毎日海に行っていた。潜りも得意だった。小学、6歳位からもう海によく行っていた。両親も皆、周囲は皆漁師だから、自然と海が好きで。魚も多いし、ただ、潜ってモリで突くことはしたけど、釣りはしなかった。本土の人はよく釣りをしていた。

菅野 台湾での学校生活で特に思い出に残っている読み物や出来事について教えてくださいませんか。

平良 台湾では、基隆にいた時は小学2、3年だから本なんか読まない。毎日海ばかり行っておった。もう、

学校から帰ると海に。だから頭も悪いし。(笑い) 学校の教科書だけ。勉強はもともと無学だからやらない。

だけど、教育勅語は小学校2年から丸暗記して覚えとった。天長節とか紀元節とかお正月とかの時にね、講堂で教頭先生が桐の箱に紫の風呂敷に包んで、それを開けて読み上げて。僕はまた、遊び半分で教頭先生が読み上げたものを覚えて。学校で教育勅語をわかる人は誰もいなかった。僕は丸暗記して。教育勅語だけは丸暗記して覚えた。

菅野 学校の当時の雰囲気や環境について教えていただけますでしょうか。

平良 昔はさ、われわれの子どもの時は軍国主義だったの。それでね、学校でも兵隊さんを直に目の前で見るから、兵隊さんの訓練なんかもよく見てるから、軍国少年だ。そういう風にやってるから、小さい頃から先生に恨みというのは絶対無い。ビンタはられても。

われわれの時代は学校から帰ると畑仕事もしたし、草刈りもしたし、水道も無いから水汲みもして。井戸から一斗缶の水を担いでくる。それを1日に何回も。朝は水汲みを3回やって学校に行って。学校から帰ってきてもまた3回水汲み。それから草刈りが。そういう風にして皆頑張った。

4 社寮町と内間長蔵

菅野 社寮町、今の和平島には現在「琉球漁民慰霊碑」がありますね。社寮町の沖縄の漁民について教えてくださいいただけますでしょうか。

平良 台湾では、沖縄の漁師がね、台湾の漁師に、日本語もわからないし、台湾語もわからないから、沖縄の久高島の言葉で漁業を教えて。この人は、沖縄の裸潜りの漁法を台湾人に一生懸命教えて。その人は後に台湾の漁師たちから「海の神様」と言われて。内間長三(チョウゾウ)。「長い」と書いて。この人が、社寮町で台湾の人に初めて潜りの漁法を教えた。この人が花蓮までずっと漁師たちに教えて。台湾の漁師たちは日本語もわからない、ましてや沖縄の言葉はわからない。(けれども)久高島の言葉は理解して。その内間長三が親身になって教えるもんだから、もう、どこの言葉であれ関係なく、その言葉を信じて、その久高島の言葉を(台湾人)漁師は皆よくわかっておったって。

裸潜りして、モリー一本持ってね。そして、クリ船で漕いで、夜は星を目当てに航海して。そして、航海の予報なんか、何月は風がどこから吹くとか、そういうことを親身になって教えたわけ。知念村の、久高島から社寮町にやって来た内間長三が、日本語もわからん、台湾語もわからんから、本当に誠心誠意を込めて、心の底から台湾の漁師たちに教えたもんだから、だから

台湾の漁師は「海の神様」って崇めたわけ。その教えられた人たちは、久高言葉を日本語と思って久高言葉を言うけど通用しない。(笑い)

菅野 そんなことがあったんですね。(笑い)

平良 またね、沖縄(宮古)の池間、伊良部、佐良浜の人たちが南方漁業に行って。向こうのニューギニアとか、何といったかな、あの辺の所の人たちに日本語を教えて、一緒に鰹漁なんかも教えていたわけ。現地の人たちを船に乗せて色々やって。で、佐良浜の言葉で話をしたら、それを覚えて。それを日本語だと思って丸暗記して。

で、伊良部、佐良浜の人たちは、向こうに行かなくなって、後になって、向こうの人たちが平良市に来たわけ。宮古島にその漁師たちが来て、役所に来て。市役所の人たちが通訳を使ってやろうとしたら、「自分たちは通訳しなくても日本語わかる」って。(笑い)それがね、池間、佐良浜の人たちが、そこの方言を教えていたわけ。向こうの人たちは、それが日本語だと思って、役所の人に佐良浜の色々な方言で話をするもんだから、皆で大笑いして。(笑い)そういうことがあったわけ。

5 沖縄人と台湾原住民

菅野 沖縄の方と台湾人はそれほど親しかったんですね。

平良 だから、台湾でね、沖縄の人たちは台湾人を本当にもう、沖縄人みたいな気持ちで台湾人と接したもんだから、台湾の人たちは沖縄人の言うことをよく聞いた。信じて。それがたまたま高砂族(日本統治時代に用いられた台湾の先住民族に対する呼称)まで。

終戦後は、僕らが彰化から社寮町に引き揚げて来た時にね、高砂族なんかが、線路を通って、歩いて物を肩に担いで色々な物を持ってきて、「布(キレ)と交換してください」と裸足で来ったよ。見たら、男の人見たらターザンみたいな人なんかでね。そういう人が来とったから、沖縄の人たちはこれを見て、交換じゃない、着けない物なんかもあるさね、そういう物なんか皆くれたら(高砂族が)喜んで。だから、僕の家にもね、色々な物なんかくれたよ。その中にね、ムササビのはく製もあって。だからビックリして。その時に初めて見たけど。この高砂族なんかは、日本人のいる所には行かんで、沖縄人の部落、わざわざ。線路を通って、着けない物があったら交換する。そこでは着ける物がないわけさ。着ける物がないから、そういう風にしてた。

で、向こうの人の生活というのは、向こうは年中山の中にターザンみたいな生活してた。これなんかはね、

もち米を作って、餅を作って。餅は冷蔵庫に入れなくても、一年中でも腐らない。その餅を作って焼いて食べる。それから獲物を捕って生活してる。だから、僕も高砂部落にも行ったことあるけど、そういう風な生活。だから、沖縄の人は親切で、そういう高砂人が来る時は、着けられる物でも「かわいそう」って言ってくれとった。

菅野 沖縄の人は先住民の方々とも身近だったんですね。

平良 後で（戦後）、僕が宮古の友達を台湾に観光に連れて行って。烏来（ウーライ）という所。高砂族がいる所に連れていった。そこで降りて歩きながらその観光地をまわって。で、水が飲みたくなったから、店に入って飲み物を買ったわけ。そしたら、お爺さんがいてね。「皆さんは沖縄の方ですか」って（日本語で）言うから皆ビックリしてね。川上という友達が、「顔に沖縄と書いていますか？」と言ったわけ。（笑い）ここには初めて来るのに、こんなに沖縄の人って知ってるって、ビックリしたわけ。

それだけね、台湾の高砂人なんかも沖縄人を尊敬するし。だから、高砂人、台湾人も、本当に沖縄人とは親しかった。だから、先生に言ったら悪いけど、台湾人なんかは、日本人にいじめられて。当時、僕もはっきりしてるけど、日本人は、「台湾人、朝鮮人は三等国民」、「沖縄人は二等国民」、そういう扱いをしていた（引用者注：当時は、一等国民を内地人、二等国民を琉球人、三等国民を本島人、とする呼び方が一般的に流通していたとされる）。だから、朝鮮人もね、台湾にいっぱいいて、朝鮮の人も沖縄の人とはよく親しくしてたけど、日本人が来たら、立ち話しとったのがパッと行きよったよ。

6 引き揚げ後の生活

菅野 引き揚げ後の生活についてお聞かせいただいてもよろしいでしょうか。

平良 昭和21年11月23日に宮古に引き揚げてきて、平二（ヘイニ：平良第二）小学校という所に4年の3学期までいて、中学は北中学3年まで。生活があまりにも苦しいもんだから、中学校もろくに出られなくて。やっと食って。だから、当時の人はよっぽどの人でないと高校出られなかった。終戦後で食べ物が非常に苦しい状態で。金持ちの人でないと高校は出られなかった。僕は学校どころか、もう中学もやっと食っておったわけですよ。

だから、台湾から引き揚げてきて、何にも無いもんだから、三度の飯を食べるのも難しい状態だったから、学校のことは、ほとんどあれ（記憶）が無いけど。で

も中学校はね、茅葺きの校舎だった。茅葺きの校舎で、土間に机があった。冬はもう、窓も無いから寒いし、それでも中学3年までは裸足で学校を卒業した。靴履く人は何名かはいたけど、ほとんど裸足だった。で、机も土間の上に机を置いて。裸足だから冬はもう寒いし。勉強どころか。で、教科書を買うお金も無い位だから、辞典なんかますます無い。英語の単語を引こうと思ってもね、辞典が無くてできない。

宮古の僕らの学校は茅葺きで。今の学校は本当に夢のような学校。地べたで、机を並べて。そういう学校。でも先生方はね、非常にいい先生方で。当時はね、給料がすごく安かった。給料が安いから、宮古の人たちは方言で「インガー教員」と。「芋の皮教員」と。芋よりも安い給料でね。「芋の皮教員」と呼ばれるそういう時代もあった。でも、そういうなかでも先生方は親身になって教えてくれた。

学校時代はもう生活が苦しくて勉強どころではない。だから、学校を卒業して、いち早く就職して。家が貧しいもんだから、どの人も茅葺きのお家だった。貧しいから。本を買おうと思っても本を買えなかった。ちょうど図書館が（夜）10時まで空いておった。毎日図書館行って本を借りて読むのが楽しみだったから、毎晩。だからそういうことがあって、もう中学時代は勉強なんか、勉強のことなんか何にも。そうすれば生活ができる。三食食べられる。

菅野 大変な生活だったんですね。

平良 でね、父も台湾におったが、一度は宮古に帰ってきて働いて。当時は鰹工場がいっぱいあって、薪を取ってきて、3名で組んでその薪を鰹工場に出しておったけど、朝早く起きて、田舎の大きいガジュマルなんかを倒して、それを割ってひと山幾らと出して、それを鰹工場なんか運んで売っておったよ。だけど、1日朝早くから働いて、夕方まで働いて、1日の日当が幾らかというと、B円の100円だった。B円の100円の価値は幾らかというと、100円で芋が10斤。当時は斤だったから10斤。今の6キロ。芋が、1日の日当で6キロしか買えない。その6キロの芋を、腹を空かした子どもたちが一食で食べてしまう。二食は難しいよ。これではもう大変なことになると、台湾にまた行って、台湾からたまたま宮古の近海の漁で、ヤミ船でお米を持ってきてくれたりして。大変な生活だった。

だから、中学3年までは宮古に小学校4年に来て、台風が来るたびに教科書もノートも皆台風で吹き飛んでしまっ。茅葺きのお家で、来るたびに潰れるわけ。中も吹き飛んで。勉強やる気持ちなんて毛頭無い。だけど、中学卒業すると、どうしても教養も必要だし、学問も必要になってきて、それで毎日図書館に通った。そうしてるうちに宮古に製糖工場が出来て、

そこに採用されて。そこで余裕ができたので月に5冊位本屋に行って買って。宮古製糖に入って本を読み始めた頃は、松本清張の推理小説から読んだ。誰が犯人かな、って。夜勤の時は、朝まで、犯人を捜すために1頁1頁開けていったよ。

7 沖縄と台湾の交流

菅野 台湾と沖縄の交流についてどのようなことが印象にありますか？

平良 僕は何年前か、母を本土旅行に連れていこうとしたら、母は「台湾を一目見たい」って言うから、台湾に妹と一緒に母を連れて行ったら、「疎開地をまた見たい」って言うから、基隆を、社寮町の住んでいた所もまた見せて。母は帰ってきてからまだ一度も行ってなかったから、社寮町なんかも皆見せて、それから疎開地も連れてって見せたら、疎開地の人と抱き合って、泣きながら色々話しとった。で、僕は「あー連れてって良かったな」と。

僕も、疎開地はどんなして行ったらいいかわからんだけど、友達の、頼さんっていう人がいて。その人と一緒にその彰化郡芬園庄県庄って所に連れてって。そしたら、そこに当時の人たちがまだ元気でおって、うちの母と抱き合って泣いて話しとった。母は喜んで、「自分はもう何も思い残すことはない」と。でも、100歳まで生きて。100歳で亡くなった。91歳までは編み物もやって、裁縫もやって。うちの母は元気者だったよ。

その母が一番喜んだのは、基隆よりも、社寮町よりも、その疎開地の、わずか4カ月位だったかな。その間のことがもう忘れられないというから、そこに連れていって。そしたらすごく喜んで。何も思い残すことはないって。そう言って。

菅野 深い絆があったんですね。

平良 昔からそうだけど、今もね、台湾の人たちは、沖縄の人と交流したいと。だから、台湾の人たちは沖縄にも観光にいっぱい来る。宮古に、下地の方にね、台湾の人が嫁に来て、台湾の品物なんか売ってるよ。その人は昭和29年生だから北京語もわかるわけさ。学校で教えてもらって北京語もわかってるから、だから宮古で中国の船なんか漕ぐ時なんかは、通訳もしたり。この人は花蓮の人だから、この人が下地の中学と花蓮の中学と姉妹都市を結んで交流してる。だから、向こうからホームステイで来たり、こっちから行ったりして交流してる。花蓮の学校と下地中学校と交流してるけど、生徒なんかも台湾好きで。台湾に行きたいって。

菅野 若者同士の交流にも繋がっているんですね。

平良 僕も台湾で生まれ育って、私の故郷であるけど。

社寮町におった人たちは（引き揚げ後も）「台湾に行きたい、台湾に行きたい」って言って。僕も本当だったら台湾にずーっと住みたかった。だけど、それは戦争に負けて、そうはいかなくなって引き揚げてきた。

僕らの年代になるとね、来年の保障が無い。宮古にもね、台湾帰りの人はいっぱいいたけど、僕よりも後輩なんかは、もう台湾のことは全然わからない。先輩なんかは、僕が気が付いた時にはもう亡くなって。僕は自分がもっと若いと思っとったわけ。だけど、考えてみたら僕も来年4月には80になる。「あーっ」と思ったけど。台湾のことをもっと詳しく知りたいと思うけど、そういう人たちはいなくなってね。

菅野 長い時間お話しいただきましたが、この辺で終わらせていただきます。お話しいただき本当にありがとうございました。

第2部 盛島サカエ オーラルヒストリー

1 幼少期の生活環境、家族構成

菅野 お生まれになって、小さい頃からの話を順番にお聞かせいただけますでしょうか。

盛島 1934年11月生まれです。

菅野 お生まれになった場所は。

盛島 池間島じゃないかね。母親は、大浦ってところ、平良市だけど、大浦から嫁に来て。次女だったよ。

菅野 きょうだいは女4人。女ばっかり4人の子どもを連れて台湾に疎開していたよ。（笑い）男の子がいないから周りも親も心配していたわけね。で、男の子が生まれたらすごく喜んだよね。田舎の人たちは。

菅野 池間島はどういった環境のところでしたか？

盛島 うちのお父さんは1人息子で、お婆さんは隣から嫁に来ているけど、このお父さんのお父さん、お爺さんに当たる人が21歳位で兵隊で亡くなったらしいよ。お婆さんも若かったはずだけど。

母親は大浦でもいい家庭だったというか、お母さんはあんまり自慢するタイプじゃないけど。お母さんの兄さん、長男は平良村の村会議員だったってよ。本家のね。部落から推されて村会議員になって。2番目の兄さん、うちのお母さんこの2番目の兄さんばかり自慢してた。那覇に出てきて指揮官してたよ。

菅野 お父さまはどのようなお仕事されていたんですか？

盛島 職業は軍人だよ。海軍で。うちのお父さんは健康な体でスポーツができて。皆昔は進学しない人は兵隊に行くよね。20歳位になると。横須賀、佐世保、ああいう所から休暇があつてね。小学校2年の時かね、た

まに帰ってきてさ。夕飯食べる時なんか軍隊式ですごく厳しくてね。箸の上げ下ろしにも目を光らせてね。鬼がそばに来てみたいにすごく怖くて。

菅野 ごきょうだいは何歳違いでしたでしょうか。

盛島 長女は昭和6年生まれで、次女、うちは昭和9年生まれ。3番目は2つ下だから昭和11年生まれ。4番目はそのまた2つ下だから昭和13年と思うよね。男の子は昭和22年だよ。戦後お父さんが帰ってきてからやっと弟が生まれて。

(台湾に)疎開した頃は、お婆さんとうちなんかの(母親ときょうだい)5名ね、この6人家族だったよ。池間一貧しい家だったけれどもきょうだいは皆できやー(頭が良い子)だったよ。水も無いで、茅葺きの家を造って。あの時小さくてもタンクさえ作れば、毎日井戸、水源に行かなくても済むのに。タンクが瓦葺きでない家っていうだけで、朝起きたら缶から持って水源に行行って水を汲んで。学校に行行って水源から水を汲んで。うちなんかバカ真面目だから、中学校の時も行き帰に坂道を。昼ごはん食べに帰ってくるさね、だから1日2回学校の行き帰りに水を持ってやっていたよ。で、山に行行って薪を取ってきて。こればかりやって。大きな余裕のある家は水汲みに行かないから何でも出来たと思うよ。

2 宮古から台湾へ

菅野 宮古から台湾へ行かれるまでのお話を伺ってもいいですか？

盛島 昭和19年だね。うちが(国民学校)4年生の時に、姉が3つ上だから、(中学校)3年生の時だね。あの時は小学校は池間国民学校だったわけね。姉は(国民学校)6年生で受験をしたよね。今は高等学校っていうけど戦前は宮中、宮高女って。うちが4年生の時に姉が3年生だったはずよ。

姉は女学校に入って1学期位してね、戦争が厳しくなってくるから、子どものいる人たちは子どもを連れて疎開してね。年寄りたちはここにいなきゃならない。また少し若い人は残らなきゃならないし。色々規則があったわけね。そして、うちの母は最初は「行かない、行かない」って言ってたけど、「台湾に行けば女学校に通わせられる」ってね。姉のために行くしかない、って。

それで、組を作って、班長は誰って決めて、大きい船に乗って。3階建て位のね、この池間島と平良港を結ぶ池間丸っていう定期船があって。大きい見たことないような船がさ。眠るところも座るところもない位で。

とにかく夕方になっていたはずよ。皆もう見送りに来てるわけね。軍艦のような船が、この船が出ていくまで最後まで見送りたいわけね。ここがうちが一番悲

しかったっていうか。こんな悲しいことがないっていう位に泣いて。多分夕方の3時か4時かわかんないけども、この池間丸は自分の島に行かないで、台湾に向かって。最後になるかもしれんって、ゆっくりゆっくり回りながらね。

あの場面がさ、人生で一番悲しい場面に出会ったようにね。自分の家族と離れ離れになって、知らないところに行かなきゃいけないって。若い女たちが集まって歌を歌ってるわけさ。「故郷を離れる歌」っていうのがあるよね。(歌を歌う)

「園の小百合なでしこ
垣根の千草
今日は汝を眺める
終わりの日なり
さらば ふるさと
さらば ふるさと
ふるさと さらば」

って歌ってね、2番か3番まで。(歌を歌う)

「ここに立ちて さらばと
別れを告げん
山のかげのふるさと
静かにねむれ
思えば涙 ひざをひたす
さらば ふるさと
さらば ふるさと
ふるさと さらば」

って、5～6名位で、16歳位の、高等科卒業したばかりか、高等科2年かもしれん。うちなんかも、これを歌いながら皆涙流して。今でもこれを思うと涙がぼろぼろ、あの時の状況が浮かんでくるけど。故郷を離れるってこんな悲しい思いしたのは生まれて初めてよね。家族が別れ別れになって。涙をいっぱい流して。それで2日間だと思う。船でゆっくりゆっくり。

で、大人たちの話では、「この船は、台湾に着くまで、(空の)上からは日本の飛行機、向こうからは軍艦がね、守っているからこの船は大丈夫」と、こういう話を大人たちは言っていたわけ。だから「途中で魚雷にあうということもない」と。飛行機は高いところから小さく見えていたよね。だから大丈夫、何も不安はないと。

3 台湾・基隆港への到着と台中州田尾での生活

朝早く、2日位して(台湾に)着いてからは岸壁には行かないで。朝早くに少し遠い所に泊まっていて、

夜が明けてくると、7時頃になってからゆっくりゆっくり基隆港に向かって。下を見たら、小さなボートのような船がいっぱい手を振って。「何船ですかー?」, 「何丸ですかー?」って言ってるみたい。で、汽笛鳴らしながらこの船は基隆港に向ってグーッと曲がって。

基隆の港に入ったら、目の前に道路があって、足を長くしてランドセルを背負った男の子や女の子が何名か登校していくね、何名か。7時過ぎだったんで。これを見てさ、「あーこんな近くに学校があるんだねー!」って。「あーこんな素晴らしい!」って。こんな都会の子たちは違うさね。足が長くて。こんな近くに素晴らしい学校があるんだなって思ったらすごく元気が出て。すごく嬉しくなってきた。

基隆に着いて、今度は、台北の一番都会のところにある大きい本願寺っていうお寺にね、そこに行くことになってね。台中州北斗郡田尾庄っていう(場所の)公学校の一棟をね、4つ教室があるところを借りてね。教室だから、疎開者の人たちが入るには2週間位この本願寺にいったんは。向こうに住まいを作るまでに、疎開者は本願寺にいったんは入らなきゃいけないって。

そしたら、田舎の沖縄のお爺さんたちが着物をつけたり下駄を履いたり、一升瓶の水を担いだり荷物を担いだり、荷物を風呂敷に包んだりして、あんなような服装でお爺さんたちが、本当にもう、今考えたらどっかの野蛮人かっていう感じで降りて。(笑い)タクシーに乗って本願寺に。

その時生まれて初めてタクシーも見て。(笑い)一回で乗れないから何台かでね。下駄履いたりした変なお爺さんたちが、もう皆がガーガーガー大騒ぎしてさ。(笑い)皆野蛮人だから何も知らない田舎の。(笑い)台湾の人たちから見たら「この人たちはどこの野蛮人か」と思ったはずよ。(笑い)

本願寺では生まれて初めて大きなお寺も見て。そばには幼稚園みたいなのもあって。そこの本願寺にしばらくあって。2週間位かね、ある時台北の駅から、台中のこの疎開者が住むところに汽車に乗ってね。何時か知らんけど、お昼過ぎか、台中の田中駅(田中=台中州員林郡田中街)ってところに着いて、そこから乗り換えて、田尾のね、台中州北斗郡田尾庄っていうところの公学校のね、台湾人が通う小学校の一棟をね。

菅野 場所をもう一度教えていただけますか？

盛島 台中州北斗郡田尾庄。田と尻尾の尾。田尾庄。村長さんに庄長さんにね。うちら50~60名の団体にね。4つ教室があるけど、1つの教室には、一番端っこの教室は、いわば炊事場みたいなのがあって。池間ではいつも井戸に行って組んできてたから、ポンプがあって珍しくて。ここで野菜洗ったりして。皆自分の家の、住んでる所の入口で炊いていたよ。

あと、病人が1人ベッドで寝かされていて。うちなんかが小学2,3年生の時に先生していた幸地ヨシオって先生が、これがもう結核か何かになって病院にいたけれども、一緒に台湾に疎開してきてここにいつも1人寝かされていたよ。

あと3つの教室に、1所帯に4畳半位作ってさ。1つの教室に6つさ、こんな感じに。竹で作ってさ。4,5名位いるのに、こんな4畳半位のところに。

で、高等科の人たちは北斗国民学校って田尾から通ってたわけ。田んぼもあって小川もあって、ドジョウ掬ってきて醤油で食べたりして。海の魚ばかり食べてた人たちが、少しは魚食べた気分になったりして。

また、汽車があって、サトウキビを積んで向こうの方に行ったりして。うちなんかの田尾から、歩いても近いんだけど、この汽車に乗ったら、川があって鉄橋があったりしてね。そこ(鉄橋)の上を汽車が「ガラガラガラガラ…」って行くのがすごく面白くてさ。たまに学校の帰りに歩いてこないで、北斗の駅の方まで行って、この汽車に乗って鉄橋を渡って田尾に帰ってくるのが面白くて。(笑い)とにかく何もかも面白くて素晴らしくて。初めて見るものばかりで嬉しくてさ。(笑い)

食べ物は貧しくて大変だったから…。台湾の人たちは目の前で、お昼(ご飯)をね、何種類も作ってすごいご馳走をおいしそうに作って食べててね。「台湾の人たちはすごい豊かだなー」って思ってたね。田んぼもあってね。まるでうちらなんか本当に本当に、台湾の人たちから見たらどっかの貧しいかわいそうな…今のうちらなんか見たら東南アジアの人たちを見てるような、裸足でもう大変な状態で…。あの当時うちなんかあんなだったし。(笑い)

70年前だからね、疎開してたの。でもこの1年間は本当に鮮明にさ、これだけはもうすごく覚えててさ。どんな小さいあれでもすごく鮮明に覚えててさ。その後の人生は苦勞してあんまり覚えてないけど。

4 疎開児童と「琉球」に向けられた眼差し

菅野 台湾で楽しかったことや悲しかったことなどを教えてくださいいただけますか？

盛島 楽しかったことといえば、ほら、北斗国民学校の校門入ったら、右手の方に奉安館って、何ていうかね、天皇陛下の写真が貼られているあれがあってね。

菅野 奉安殿ですね。

盛島 そう奉安殿。そこで最敬礼してから教室の方に向かって。そしたら担任の先生がね。台湾の人は皆きれいな洋服つけて、うちらなんかどっかの田舎の野蛮人っていうような、服装から何からもう…。本当に

うかわいそうな状態だった。

引けを取らせないように、担任の先生も、ヒロオカ…、何キヨシだったかな。キヨシ先生っていう男の先生がいてよ、この沖縄の人を持ち上げて。台湾から見れば（沖縄も）内地さね。「内地の人はやっぱり違う」ってね、「はい、二二が四を言ってください」って、今度は台湾の人たちに言わして。「二二が四～、…二五十～」って何かお経読んでるような調子で面白い言い方して。

「はい今度疎開の人たち二二が四を言ってください」って言って、皆合わせて「二二が四！…二五十！二六十二！二七十四！」って。台湾の人たちは変な調子で言ってるのに（対して）、「やっぱり内地の人たちは違う、すごいすごい」って持ち上げてさ。（笑い）「やっぱり沖縄の人は違う、内地（沖縄）からの人たちはやっぱり違う、優秀」とか言ってさ。今だったらけなしそうなもんだけどね、変な服装して。元々いるヤマトの人たちに比べたら惨めだったはずだけど。すごく楽しいいい先生だったよ。沖縄の人をいじめないで。で、この先生は兵庫県の出身っていつて30位か知らんけど、軍隊のようなズボンつけて、非常に真面目ないい先生だったよ。この先生も元気かなーって時々思うよ。（笑い）

菅野 学校で台湾人や内地からの学生との関係について思い出はありますか？

盛島 あんまり台湾の人たちとは他の人たちとは…。やっぱり授業終わったら早くまた「お家に帰ろう」とか「駅まで行こう」とか、自分の島の人たち、村の人たちとばかり集まってばかりで。内地の人たちと集まったりっていうのもあんまりないで。とにかく忙しい思いっていうか、貧しいっていうか。

それで一番面白いのは、雨の日に、今でいうカッパもない傘もない、お金もないよね。バスに乗るお金も。向こうまで、北斗国民学校まで相当あるし。雨の日に、皆貧しくてよ、どこの家も傘もカッパもないから、登校の時間になったけど、「どうしようかね、どうしようかね、雨がいつまでも止まないね」、って言ってる間に時間が過ぎるよね。どうすることもできないで。結局その日学校休んで行かなかったわけね。

そしたら翌日先生が、「疎開者の、この田尾の人たちは皆昨日どうして登校してこなかったか、1人1人理由を言いなさい」って。最初に、佐久本君っていう男の子が、「昨日は、雨が降っていたので、お母さんが、学校休みなさいって言ったので、休みました」って。これに合わせて皆後の人皆、6名だったけど、「お母さんが、…雨が降っていたので…」 「…お母さんが学校休みなさいって…」って、1人残らず同じように言ったから、この先生は「不思議だ」と。「沖縄のお

母さんたちは雨が降ったら学校休まずのか」と。（笑い）

本当のあれ（理由）は貧しいからだけだね、「沖縄のお母さんって不思議だ」ってね。「雨が降ったら学校休みなさいと言うのか、初めてこういうこと聞いた」って。（笑い）これがもう一番。（笑い）

でもあの時ね、こういうこともあったよ。昔は琉球王国があって、今沖縄の人は琉大とか琉球銀行とか皆「琉球」付けるんだけど、これが沖縄のあれ（名称）となっているけれど、うちなんか本当に、自分たちの沖縄県を「琉球」って言ってることも知らなかったわけね。「琉球」聞かされたこともないし、学校で習ったこともないで。

で、うちのお母さんと同じ集落のおばさん、元気なおばさんがおって。北斗の方にて。田尾じゃないけど。ある時街を歩いてたら、あの時の台湾の人たちはね、家の中からこんなして見てさ、窓からね、疎開してきた沖縄の人たちが買い物とかで街を歩いてたらね、人をからかってるような感じでね、「琉球人ー！琉球人ー！」ってね、バカにしてさ。あっちこっちから聞こえてからさ。（笑い）

「侮辱された！」って、その元気なおばさんがね、子供たちをね、交番に、「沖縄人をバカにしてる。何が琉球人か！」って交番に突き付けようとね、やっていたら、この台湾人の親たちは、「自分たちは、子供の時は学校で沖縄のことを琉球と習った」とね。だから、「琉球人、琉球人っていうのはこれは当然のことで、少しもバカにしていない」、ってね。

私は生まれて初めてこういうの、ね。琉球と聞いたらバカにされたと思ってね。本当に何にも知らなかったって思ってね。今はもうこんな琉球を誇りに思って何にでも付けているのにね。（笑い）70年前だから、琉球って、沖縄の本当のあれ（名前）が琉球ってのも知らんで。

菅野 「内地」出身の方々は近くに住まわれていたんでしょうか。

盛島 鹿児島とか愛媛県とかどっかの県からのね、移民部落があったね。明治だか大正のあたりに移民してきた。うちらなんかの田尾の向こうにも部落があって。学校に登校する途中にも、鹿児島の人の移民部落が。皆大きい家を造って。皆もう大々的に農業していたわけ。野菜とか色々。裕福そうだったし。疎開の人たちのお母さんはたまにはこういう部落に行ってお芋を買ってきたり。

5 終戦と蘇澳までの逃避行

盛島 職員室の隣に廊下があって、そこで友達と遊んでいたら、天皇陛下の話、戦争負けた時の話してる時。

なんか職員室の方から大きいラジオの声で、聴き慣れない、普通の人の話し方とは違った甲高い声がラジオから聞こえて。しばらく何を話しているのかわからなかったけど。

自分たちの教室に歩いてきたら、その部屋の全部の（疎開者）班長みたいにして連れてきた幸地のおじさんが、弁当箱持って泣いているような状態で。「もう大変だ大変だ、戦争負けたからこれからどうなるのか」ってさ。もうびっくりして。「これは大変なことになったね」ってうちなんか子ども心に思ったけど。

今考えたら8月中だったと思うよ。その幸地のおじさんの三男が台湾の鉄道あたりで働いていたらしいよ。で、そのおじさんは21くらいの息子に連絡して、なんとかこの田中から蘇澳ってところまで汽車をね、貨物列車をね。そのうちに宮古から船が、漁船が迎えに来るから、（宮古に）行けるはず、って。で、連絡し合ってその貨物列車を一つね、田中に来た時に。シナの兵隊たちがね、青い服つけて、銃を持って立っているからね、見られたらね、その銃で殺されるはずって恐ろしかったよ。

で、田中の駅から、一つの貨物車に20名余り位の、食べ物も何も準備しないで、生米なんかは皆持っているはずだけれども、大根の漬物だけそれぞれ持って、これ（貨物車）に詰め込まれるようにしてね。

大根の漬物かじりながらね、今考えると一晩だったと思うよ。貨物車に押し込まれてさ。息をひそめて。翌日のお昼前かどっかで、港のそばまで下りてきて、汽車から降りて歩いたよ。どこかは覚えてないけど。

港に着いたら漁船が来てるわけね。30トンか35トンか、あまり大きくない鰹船だけどもね。それには島から船長が、長浜っていうおじさんがね、血はつながってはいないけど親類のようなおじさんが船長してきているけどね。この船には20〜30名は乗らないはずだけど、この乗組員が、自分の親類を迎えに来てて、ちゃんと乗るべき人は決まっていってね。帳簿に誰々家族を5名、10名とかね、これを書いてきているもんだから、簡単には乗れないわけよ。

「乗せてください」って言っても、空きがないと簡単には乗れないわけよね。で、ちょうどこの長浜の船長のおじさんが迎えに来たのは、自分の妻の実家の、向こうも4〜5人位の家族かね。自分の親戚。あの人たちはうちらなんかの一月前に疎開していたみたいで、南投って、南投県っていう向こうの方に、もっと山奥のマラリアのすごい所にパイン工場とかあったみたいね。南投の遠い山のところに行ってて。ここ（蘇澳）まで出てくるあれ（手段）がないわけよね。

（私たちの蘇澳までの移動は）幸地のおじさんがやってくれたけど、そうじゃない人は。こんな大変な時に、

シナ兵もあっちこっちで目を光らせてるし、身動きができないで。この船長の親類の人たちが乗る予定だったけど、消息がわからない。いないから乗せられないさね。うちなんかちょうど5人家族で。ちょうどいい具合にさ、長浜のおじさんに言って乗せてもらってさ。夕方になってから出港したと思う。小さな漁船にやっと乗れて出港したと思う。海を見たら波は荒れてるような感じでね。「ああもう宮古に帰れる」ってホッとしてさ。

6 蘇澳からのヤミ船での帰還、その後の生活苦

菅野 出たのは蘇澳からですか。

盛島 蘇澳の港からね。疎開しに来た時は基隆だったよ。大きい船で。蘇澳からは小さい漁船で。やっとの思いで。もう乗れないかと思ったら。向こうの人たちが（南投から）出てこないもんだから、ちょっとの差で乗せてもらったけどね。

出たの夕方だったと思うよ。夜になったらもう、小さい船で波に揺られてさ。今沈むかと思う位に、もう、飛沫がすごくて沈みそうに、もう。お婆さんたちは、「タビハイナー」っていうこういう歌を歌ってね。昔の民謡さ、これを歌ったら死ぬ間際の、こういう歌を歌ったりしていて。（笑い）

菅野 「タビハイナー」ですか？

盛島 「タビハイナー」の歌を歌ってる人もいたし、とにかく死に物狂いで潮風に濡れながら、今にもこの船が沈みそうな、すごく恐ろしい思いして。少しでも船が身軽になるためにドラム缶を（海に）落としたり、荷物でも重い物を落としてね。島に着いたのも夜になっていたよ。

着いても、自分の家の近くに来てても、畑みたいになって何もない。燃えて。家も何も無くなっているから、自分の元いた所には行けないで。友達のお婆さんの家に行ってさ。

菅野 蘇澳か宮古まではどれ位かかったんですか？

盛島 そこら辺は全然わからないの。最低二晩だよ、宮古から台湾に行くまでは二晩だったよ、普通の船は。だから二晩だと思うけど、死に物狂いだったからね。船にもう、カバーがあれされて。濡れながらも。船もろとも今沈むって思う位の。あれよりも恐ろしいことは無かったよ。すごく恐ろしかったよ。どこに誰が寝てるかもわからんで。自分の子どもか人の子どもかもわからんで。気がついたら自分の子どもじゃなくて人の子ども抱えてる人もいて。「自分の子どもどこにいるのか」って、とにかく何がなんだかわからんで。台湾いた時は何も怖いこと無かったけど、この船で帰る時が一番恐ろしかったよ。

運が良くて早く帰れてね。8月中旬に帰れたはず、と思う。何月何日ってのはこればかりはあんまりわからなくて。夜に着いたと思うけど、これから後の生活は、毎日食べるのもどんなしてやったのか、5,6年生の頃。6年生の始め位に、うちの大浦のお母さんの方の親戚が、松の木とか萱とかを切って、親戚同士で模合とか起こして集めて、やっぱり、どんな家でも早く家を建てないと言ってね。田舎には松の木とか萱とかもいっぱいあるから、助け合っただけでいいからって。やっとの思いで向こうのおじさんたちが茅葺きの家を造ったんだけどさ、台風来たらまた壊れて。こういうこと2,3回だよ。

菅野 台湾から宮古へ引き揚げた後のことですね。

盛島 戦争から帰ってきてても、台風でまた何から何まで…これでもかこれでもかと。大きい家の人はそうでもなかったんだろうけど、食べる物もない、家もこんなして潰されて。皆頭悪くはなかったけど、姉さんも高等女学校に行けないで、苦勞して看護婦になったりしていたわけよ。中学3年で受験の時にはお婆さんは胃がんか何かで今にも死にそうで、で、お父さんはあの頃に鰹節で何か奄美大島のどっか、小さい船借りて鰹節みたいな物を積んで、うちのお父さん船長していたから、3,4名位で奄美方面に行って、鰹節売のために行って捕まえられるね。ヤミの状態だから。6カ月位取り押さえられて戻ってこなかったわけね。うちが受験しなければいけないこんな一番重要な時に、お金もない、食べ物もない。こんな時にどうすることもできないで…。最悪な…。

だから今考えるとうちの人生は、「悔しいー！」っていう、あれ（苦勞）の連続と思うよね。（笑い）受験の時だって、お金が少しないだけで、自分よりできない人たちが受験をして入っていくし。あの時が一番人生の分かれ道だったね。もう少しお金があれば、うちの人生も変わっていたのにな。何もできなくてもいい、とにかく毎日の生活が心配なく物が食べられてね、何か買い物に行こうと思っても心配なく買い物に行ける、こういう状況になりたいとばかり思って。他の望みはないよ。

7 引き揚げ後の生活

菅野 他に戦後になってからの思い出とかはありますか？

盛島 たまに舟艇で来る以外はあんまり来なかったよね。漁村ではいっぱいカツオ業していて活気づいていたからね。戦後は台湾からもあまり帰ってこないさ。兵隊も1年位後に帰ってきたりね。皆少しずつ畑をやったり。学校も最初庭で、木の下で勉強していたり

したからね。

うちなんかは15~16からカツオ工場で働いて。好きじゃない仕事だけでも、これをやらないと生活ができなくて。綺麗に削れなくていつも叱られながら仕事しててね。今考えると10年近く。八重山では船もいっぱいあって、冬もカツオをいっぱい削らなきゃいけない。八重山の人たちには鰹節を削る技術があまりないわけね。家庭持つてる若いお母さんたちはこういう技術はないで、鰹節を運んだり。「いいねーあんたは鰹節を削る技術があつてー」ってね。

で、26歳になってから八重山のパイン工場で募集しているって。宮古の人で知り合いの人もパイン工場で班長になっていて。若い人を募集してるって、パイン工場行ってね。八重山には、2~3年はカツオ工場、パイン工場、パインの農場とかね。

菅野 八重山でも働かれていたんですね。

盛島 やっぱりちょっとでも働いたらね、郵便局現金書留封筒に現金を入れて送るわけね。こればかり楽しみにしてね。収入が無い島だからさ。でも、どんな仕事行っても、「高校卒業以上」とあるから、どうにもならないわけね。人のお手伝いさんか、どっか工場探してやるか。あの時は八重山にさえ行けば色々な労働があつたよね。パインの農場、サトウキビの製糖工場。

菅野 羽地（名護）にもいらしたんですね。

盛島 パイン工場の仕事は一カ月しかないけど。羽地の伊佐川ってこのパインの工場も行ったよ。工場の中も、パインのすごくいい匂いがしてきて。皆雨靴履いてあれ（帽子）かぶってエプロンして。うち今でも一番好きなのパインと鰹なんだよね。自分がやってたから。パイン工場に行くのは30近くなってから40になるまで、8年位連続で向こうに年に2回、八重山の方にも年に2回とか行くけど、とにかく工場自体がすごく綺麗で。

盛島 人生ってさ、次から次へと思いがけないことが起こるよ。予測できないっていうか。うちなんかね。今はこんな平穏な生活ができていいけど、本当に生きることは大変だったな一と思って。自分の大事な人たちは皆亡くなっていくしね。人生は楽しいことも喜びもいっぱいあったけどね。

菅野 ではそろそろお時間となりました。この辺りでいったん終わりにしたいと思います。長い時間お話しいただきありがとうございました。

【本資料は、科学研究費補助金（課題番号：25257009）による成果の一部である】